

# 東アジア児童文学のゆくえ⑤

## —ゼロ年代中国児童文学における安房直子

成實 朋子

\*賢治・南吉・未明、そして安房直子

「中国でよく知られている日本の童話作家は、宮沢賢治に新美南吉、小川未明、そして安房直子。安房直子は若い女性に特に人気があります」

これは二〇一五年の冬に、上海から来日した中国の児童文学者による発言である。愛知県半田市にある新美南吉記念館を一緒に見学した際に、中国でよく知られている日本の童話作家は誰かと問われ、このように答えていた。

ここで宮沢賢治の名前が筆頭に挙がることに對して、特に異論はないだろう。宮沢賢治はおそらく東アジアで最もよく知られた童話作家の一人である。私は二〇一二年の第十一回アジア児童文学大会（東京）で、「子どもの本の翻訳『東アジア』」と題するシンポジウムを企画した際に、東アジア三地域（中国・台湾・韓国）において、二〇〇一年から二〇一一年に日本語から翻訳出版された子どもの本について調査したことがあるが、いずれの地域においても、

賢治童話の翻訳点数は抜きん出て多かった。

新美南吉は、中国では「去年の木」という小品が、二〇〇四年に人民教育出版社の小学校四年生用国語教科書『語文』に掲載されるようになってから、ぐっと知名度を上げた。この作品がなぜ教材として採択されたのかという経緯は定かではないが、人民教育出版社は中国では最大シェアを誇る教科書会社なので、その影響力は大きく、現在中国では新美南吉の作品は広く翻訳出版されている。『ごんぎつね』よりも『手袋を買いに』の方が数多く翻訳されているのはお国柄だろうか。

小川未明は日本の童話作家の中で、最も早く中国で翻訳紹介された一人である。私が調べた限りでは、その最初の翻訳は、一九二四年に『小説月報』という文芸誌に掲載された『蜘蛛と草』である。一九三三年には新中国書局より、小川未明童話集全四冊が出版されている。日本では、一九五〇年代に古田足日の「さよなら未明―日本近代童話の本